

フォークナーの作品に見る階級意識
—人種とお金が織りなす南部格差社会—
(要旨)

広島大学大学院文学研究科
博士課程後期人文学専攻
学生番号：D181378
氏名：早瀬 博範

本論文では、フォークナーの階級意識の解明を目的として、彼の主要な長編小説や短編小説に描かれる登場人物たちの階級意識や階級制度への対応について、旧南部から新南部への移行する社会背景を考慮し、詳細な分析を行った。各章の要旨および、そこから導き出される結論は以下の通りである。

第一章「旧貴族階級の衰退—『響きと怒り』における金と愛」では、かつて階級制の頂点にいた旧南部名家の末裔となる、クウェンティン、ベンジー、ジェイソン、キャディーの苦悩を詳細に分析し、衰退の理由の解明を試みた。結果、新しい時代への価値観へうまく切り替えができず、むしろ過去の階級制にとらわれ過ぎていること判明した。黒人説教師シーゴック師の説教は、「救済の響き」としてディルシーの美德を後押し、コンプソン家の末裔の人々の生き方に対するアンチテーゼとなっている点も論証した。

第二章『『アブサロム、アブサロム!』における階級闘争』では、サトペンの「計画」の実行過程を詳細に分析することで、南部の階級制の本質を明らかにした。その際、階級制の根幹に流れる「パターナリズム」に関する彼の「無知」が、「計画」の失敗と彼の死をもたらす要因となっていることを明らかにした。さらに、ハイチが、革命の脅威と同時に、出版当時のアメリカ帝国主義政策が影響している点も論じ、フォークナーの社会意識の高さを示した。『アブサロム』が、南部の根幹である階級制の本質に迫り、彼の鋭い時代感覚から生まれた作品であることを論証した。

第三章「プアホワイトたちの階級闘争」では、プアホワイトであるスノープス一族を描いた「スノープス三部作」に見られるアブ、フレム、ミンクを中心に提起し、彼らが南部の階級制に対してどのような行動を示すかを詳細に分析し、彼らが南部資本主義の推進役を果たしていることを論証した。アブは、プランターへの不満を「納屋を焼く」という過激な行動で階級制を破壊し、フレムは、古い体制を壊し、新たな資本主義体制による階級制を作り上げ、南部の近代化の推進役を果たしていることを証明した。ミンクに関しては、彼の行う殺人は個人的なレベルでの復讐劇に過ぎず、彼を英雄視したり、行動を評価したりするのは難しいが、支配層に秩序やパターナリズムを求めて、階級を正すことが彼の役割であることを明らかにした。さらに、リンダの加担がこの個人的復讐劇を人道的にも社会的にも意味合いを高めている点を重視した。非情な資本家フレム、旧南部的秩序を願うミンク、そして戦う女性リンダの3人を通して、近代化が進みつつある南部に存在するイデオロギーを、フォークナーがバランスよく描いている点を明らかにした。

第四章『『行け、モーセ』と『墓場への侵入者』における階級の揺らぎ』では、この二作を一続きの物語と見なして、奴隷制を基盤にした旧南部体制の実態と、時代の進行とともに、それが徐々に揺らぎ、崩壊の道をたどる様子を論じた。旧南部体制の揺らぎは、主流派の白人アイクと、社会的マイノリティである黒人ルーカスや少年チック、そして女性ハバシャムがもたらしていることの重要性に着目した。特に、マイノリティの人々に階級制の揺れを起こす役割を与えている展開は、これまでに見られない視点で、フォークナーの意識の変化であり、彼らへの期待と見ることができる点も明らかにした。

第五章『『エルサレムよ、我もし汝を忘れなば』における反資本主義的構図』では、大恐慌を舞台にして、経済的困窮の中で苦悩するウィルボーンとシャーロットの生き方を「愛か、お金か」と

いう観点から考察した。彼女が唱える「愛の哲学」は、神も愛も消滅させた資本主義社会への彼女なりの反抗と解釈できる。「野性の棕櫚」は反資本主義的な要素が溢れているが、それが、「オールド・マン」が並置されることで、彼らの生き方の不自然さが強調されている構図も論証した。それでも、作家の立場は中立で、やり場のない怒りや苦悩があっても、虚無的にならず、耐え生き抜く手段を見つけるべきだという作家のメッセージを確認した。

第六章「フォークナーとニューディール政策」では、ニューディールとフォークナーの関係を探った。個人と、作家としての、それぞれの立場でのフォークナーのニューディールへの態度を検証した。その結果、個人的な発言を見ると、ニューディールが、南部人の独立心、尊厳、忍耐などこれまで大切にしてきた美德が踏みにじられるという理由で、明確に反対の立場である。一方、短編「誇り高き男たち」と「主のための屋根板」の詳細な分析を試みた結果、これまで定説とされてきた「南部農民の誇りや尊厳」への称賛や、「ニューディールへの反対」という見解ではなく、彼らは時代の変化に適応できず、不適応状態であることを論証した。作品中における作家フォークナーのスタンスは、自らの個人的な意見は封印し、中立的な立場で実態を描いている。それが作家として「優位な視点」となっている点を明らかにした。

以上のように、フォークナーの主要作品を階級という視点で読み直すことで、各作品において新たな視点や、これまでの通説とは異なる見解も得ることができた。各章の議論を踏まえ、以下を本論文の結論とする。

フォークナーの作品では新旧二つの階級制が提示される。一つは、旧南部の奴隷制を基盤にしたものと、もう一つは、その後の近代化によって構築される、お金を基盤とした資本主義体制での階級制である。旧南部体制での階級社会は、サトペンの「計画」では、土地と屋敷と白人の良家の血筋であると考えたが、それだけでは不十分で、パターンリズムが求められる。一方で、この言葉を「名目」に使い、奴隷の心も体も支配している実態もある。とりわけ女性の奴隷は、『行け、モーセ』で暴かれるように、権力者の身勝手な欲望の犠牲者となっている。彼らは人種とジェンダーによって差別される。奴隷制階級社会は完全な父権制であるため、白人女性でも、発言権も、さらには存在すらないという実態が描かれている。人種に加えて、ジェンダーも階級を構成する主要な要素であることがわかる。

古い階級制に対して、『響きと怒り』のクウェンティンのようにユートピア的郷愁を抱く登場人物もフォークナー作品には多く登場する。エデンの園のような秩序や牧歌性、汚れのなさを見出している。『行け、モーセ』で、大森林でオールド・ベンを求めて狩猟を楽しむ白人男性たちも、その守護神である。この旧南部への憧憬がフォークナーの階級意識の根底にもあり、近代化の現実との葛藤が作品へと繋がっていることは確かである。

一方で、フォークナーはその階級制に揺さぶりをかける動きも描き、変化の必要性も示している。支配層のアイクは、奴隷制下における先祖の女性奴隷に対する非人道的行為に辟易し、自ら遺産を放棄する。さらに、新しい黒人ルーカスの登場や、『墓場への侵入者』で見せる少年チック、老婦人ハバシャムら行動は、社会のマイノリティが階級制を大きく揺るがす行為として注目した。この

点は、フォークナーの階級意識の深さとして重要である。

資本主義が導入されて奴隷制に基づく階級制は消滅するが、今度はお金による新たな階級制が形成される。財産だけでなく、血筋や伝統、そしてパターナリズムなど目に見えない価値によって決定されていた旧南部の階級制と違って、完全にお金だけで決定される資本主義下での階級制は、全ての人にとって平等ではあるが、厳しい競争社会であり、道徳性や人間性などは一切不要な殺伐とした世界である。スノープスー族は古い階級制を壊し、新たな階級制に乗ろうとする新興勢力であり、フレムはまさしく資本主義を体現する人物として、南部の資本主義の推進役を担っている。しかし、階級の頂点に立ったフレムも、強い疎外感だけが残る孤独な最期である。ミンクは古臭くパターナリズムを求めて階級制を正す役割を演じる。また、『エルサレム』では、資本主義が破綻した恐慌期に、「愛も金もない」と嘆くウィルボーンやシャーロットのように、資本主義が作り出した階級制も、また人々を苦しめている実態が浮き彫りにされる。

いつの時代であっても、どのような社会制度であっても、苦悩や試練は常に訪れる。それでも、人間はそれに耐えて生きていかなければならない。『エルサレム』のウィルボーンの最後の台詞「悲しみと無の間で、悲しみを選ぶ」という決意は、作家の送る強いメッセージである。さらに、『響きと怒り』で忍耐と愛を体現しているディルシー、『エルサレム』の「オールド・マン」で、大洪水の中から女性を救い出す囚人、『館』で「ユダヤ人の共産党」と侮蔑の言葉を浴びせられても、自分の決めた道を歩む戦う女性リングダ、『行け、モーセ』で自己の権威を主張する黒人ルーカス、また彼を助ける少年チックや老婦人ハバシャムたちは、フォークナーが描く希望である。

フォークナーは1970年代までは、技巧の作家として見られ、経済や政治などの社会的な事柄には無関心と考えられてきた。しかしながら、本論文が試みたように、階級という視点で彼の主要作品を見直してみると、どの作品においても、登場人物の性格や苦悩の真相、時代背景の意味、作品の意図など、新たな読みの発見があり、階級という視点でのアプローチの有効性を証明できた。フォークナーの階級意識は常に鋭く、深く、社会の抱える問題の真相を鮮明に浮き彫りにしてくれている。階級問題は、人種やジェンダーの要素も加わり複雑ではあるが、より包含的な視点と言える。